樋口一葉の歌一首

――『慶音集』をめぐって――

山根賢吉

明治二九年四月五日、六条定光を発行兼編輯者とする『慶音集』という詩歌集が刊行されている。この詩歌集は、幕末に左大臣、関白を歴任した近衛忠熙の米寿を記念して編集されたもので、冒頭には「皇后陛下賜歌」として、金地に紅の横線ある色紙に、

このやとの桜のいとをくりかへし末なかゝれとうくひすのなく

と記された歌を直筆のまま印刷してある。皇后（後の昭憲皇太后）は、かつて忠熙に和歌を学ばれたことがあり、その米寿を祝してこの歌を贈られたのである。ついで、近衛篤麿（忠熙の孫）の撮影による忠熙の写真一葉があり、その裏に、忠熙の

老の身は八十にあまる八つのとしかさねて春にあふそうれしき

の直筆（銅版）が付されている。

以下、袋綴和紙一一三葉に、和歌・俳句・漢詩が活版で印刷されている。和歌八一葉、俳句一葉、漢詩三一葉である。

和歌は短歌と長歌とがあるが、総題は「鶯有慶音」で、短歌一三八九首、長歌二首（うち一首は反歌を付す）を収めている。すべて一人一首で、冒頭に晃親王以下七人の皇族の作を置き、その後、道府県別に次の通りの歌数を列ねている。

東京	344	神奈川	3	新潟	5
京都	177	兵庫	42	埼玉	4
大坂（ママ）	94	長崎	1	群馬	5

千葉	1	茨城	1	栃木	1	奈良	62	三重	77	愛知	122	静岡	22	山梨	8	滋賀	11	岐阜	14	福井	6	石川	2
島根	2	岡山	84	広島	29	山口	3	和歌山	6	高知	2	大分	2	宮崎	2	鹿児島	3	北海道	2	東京	140	栃木	2
福井	1	広島	4	岡山	17	徳島	1	香川	1	愛媛	1	佐賀	1	北海道	1								

右のように、実に三六道府県にわたっている。その後に近衛家の人たちの歌五首と、二一首の歌とがある。最後の二一首は、何のことわり書きもないので不明という外はないが、あるいは近衛家に仕えていた人たちの作であるかも知れぬ。

短歌の後に、長歌二首があるが、いずれも青森県人の作である。

俳句は六句に過ぎず、東京　五句、新潟　一句である。

漢詩は合計三一一編、そのうち総題「鶯有好音」中に収められているもの三〇六編について、道府県別に記すと、

茨城	1	群馬	1	埼玉	2	新潟	3	兵庫	7	神奈川	2	大阪	8	京都	36	東京	140	栃木	2	奈良	4	三重	34
愛知	12	静岡	3	山梨	2	滋賀	10	長崎	1	青森	11												

となり、短歌よりすくないが、二六道府県に及んでいる。最後に「奉賀近衛老公八十八栄寿」として、東京　二編、京都　一編、大坂　一編、長崎　一編を置いている。

稀に谷干城のように、和歌と漢詩と両方を出している者もあるが、一人一首、一句、一編を原則としており、その総数は、延べ一七〇八人に達する。道府県間に人数の差違が認められるのは、近衛家所領との関連があるのではないかと考えられるが、今は煩雑にわたるので割愛したい。

さて、和歌にしても、漢詩にしても、各府県（北海道は少数につき省略）の最初の部分は、爵位、位階順に作品を並べ、次

に無爵無位の者を、姓のいろは順に配列している（ただし、短歌の最後の二一首はそうなっていない）。また七十歳以上の者については、姓名の下に年齢を二行に記している。ただ「徳川公爵男　家正」については「十一歳」とあり、これは特に年少者だったから、例外的に記載したものと考えられる。

和歌の中の「東京」の部では、「伯爵夫人　伊藤梅子」（博文夫人）、「従二位伯爵　勝　安芳七十三歳」「従二位子爵　谷　干城」らのほか、「従五位文学博士　小中村清矩」「従五位　木村正辞」「従五位　伊沢修二」などの名が見え、「静岡」の部のトップは「従一位　徳川慶喜」である。歌人としては、御歌所派の歌人たちが顔を並べている。すなわち、「正三位子爵　福羽美静」「従三位子爵　黒田清綱」「従三位男爵　高崎正風」「正六位　税所敦子七十一歳」「正六位文学博士　黒川真頼」「従六位　本居豊頴」、無位の中に「坂　正臣」「鎌田正夫」「中村秋香」「大口鯛二」「小出　粲」らの名が見える。民間歌人としては、「従五位　鈴木重嶺八十二歳」「橘　道守」「松浦辰男」「小杉榲村」「江刺恒久」「佐々木信綱」らも出詠している。女流歌人では、「従五位　下田歌子」をはじめ、「鶴　久子」「松の門三艸子」らの名が見え、中島歌子は次の歌を出している。

鶯のも、よろこひの声きけは君かそのふのこすゑ成けり

中島歌子の門下としては、「中牟田子爵女　常子」「小笠原子爵妹　艶子」が見えるが、これらは、いわば別格で、無位無爵の者としては、わずかに「田中みの子」「中村礼子」「三宅龍子」「樋口夏子」らの名が見えるに過ぎない。伊東夏子も鳥尾広子も見えない。田中みの子は、

鶯もよろこふ声そ聞ゆなるちよへむ君かその、あたりに

中村礼子は、

君かへむ千歳の今日ははしめそとうれしけになく庭の鶯

三宅龍子は、

鶯もこゑをつくして此春はきみが千とせをいはひ顔なる

を、それぞれ出詠しており、樋口夏子は、

春かすみかさなる君かよはひをはまちよろこひて鶯の鳴

を出している。

右の一葉の歌は、『樋口一葉全集　第四巻(上)』（昭和56年12月筑摩書房）所収の「詠草41　みやき野」（明治26年4月～28年12月）中の

鶯有慶音　近衛従一位公八十八賀

36　春霞かさなる君かよはひをは待よろこひて鶯の鳴

と同一歌であり、漢字とかなの相違は、作者によって改められたものか、『慶音集』編者によるものか不明である。ただ『慶

音集』所収の短歌がすべて一首二五字に統一されているので、そのために相違が生じたと考えられる。題の「贈有慶音」は、『慶音集』の和歌の総題と一致し、一葉は最初から『慶音集』への掲載を意識して詠んだものに相違ない。

一葉の生前に公表された歌としては、現在判明しているのは、『四季の花　第二集』（明治21年6月）に一首、『大八洲歌集上巻』（明治21年10月）に一首、『千代田歌集　第三篇』（明治26年7月）に一首（ただし、表記の相違を除いて『大八洲歌集上巻』所収歌と同一）、『智徳会雑誌　第三一号』（明治29年8月）に八首、合計一一首（同一歌を除けば一〇首）に過ぎないが、わずか一首ながら、右の『慶音集』所収歌をも加えるべきであろう。

もちろん、一葉が直接近衛家と関係があったとは考えられない。ただ「蓬生日記　一」の明治二四年一〇月の記事に、

廿四日　空晴たれどいと寒し　八時頃より家をば出ぬ　師の君は昨日より例のごとなやみ給ひていとくるしげにおはしませど近衛家の令夫人うせ給ひしに其弔ひせでやとておのれに留守ゆだねて朝のまに趣き給ふ　前田利嗣君の令妹にて芳紀廿三とか聞止し　若君御出生の日成しとか　来会者今日は多からず　伊東夏子ぬしもいとおくれて参らる前嶋むつ子君入門せらる　十時斗師の君帰宅　題二ツ成し師の君より近衛篤麿君が哀傷の歌を承るに

なき数に母の入しもしらぬ子のゑがほ見るさへかなしかりけり

誠心誠意の作はげに天地をも動かすべき成りとて師の君歎じ給けり

とあって、歌子と近衛家との関係をうかがわせる。恐らく一葉も、歌子同様、篤麿の歌に感動したことであろう。ただし、篤麿夫人衍子の死は二〇日であって、二四日は葬儀の日であったのかも知れぬ。また「若君御出生の日」は一二日であって、衍子は出産当日に死亡したわけではない。この「若君」こそ、やがて成長の後、大正・昭和の政治家として活躍し、昭和一二年以降、三度内閣を組織し、同二〇年一二月一六日、戦犯として米軍の法廷に出ることを潔しとせず自決した近衛文麿である。

ともあれ、右の一葉日記の記事は、中島歌子と近衛家の関係を示すものであり、篤麿の祖父忠熙の米寿を祝して、詩歌集『慶音集』刊行に際し、一葉に出詠をうながした者は中島歌子と推定してよいであろう。二八年秋以降、とかく萩の舎と疎遠になっていた一葉に、あえて歌子が出詠を求めたのは、単に歌人としての一葉の力量のみでなく、この年に入って、「ゆく雲」

（5月　「太陽」）、「にごりえ」（9月　「文芸倶楽部」）などによって、にわかに小説家として認められた一葉の名声によるものではなかったかと思われる。

皇后の歌を冒頭に、貴紳、貴婦人が名を列ねる『慶音集』に、一葉の歌が収められているのは、何とも妙な感じがするけれども、やはり、しかるべき理由あってのことと考えられる。歌は旧派の常として、題にあわせて流暢に詠んでいるが、特に個性的なものがあるわけではない。

なお、漢詩の部について、著名人をあげるならば、「従三位公爵　徳川家達」「従二位侯爵　西園寺公望」「従二位伯爵　伊藤博文」「従三位　大鳥圭介」「正四位　中嶋信行」「正四位文学博士　川田　剛」「正四位　田辺太一」などが目につく。湘煙を妻としていた信行も、龍子の父太一も、ともに忠熙の米寿をことほいでいるのである。また、当時の漢詩人として、岩溪晋、松平康国、大久保　達、小室重弘、森川　鍵らも名を列ねている。

（本学教授）